

19世紀ロシアにおける雑階級的 インテリゲンツィヤとその性格について

村 井 研 治

「インテリゲンツィヤ」という語が19世紀ロシア社会にその源をもっていることは周知のことであるが、これはまた、当時の「雑階級人」(Разночинцы)ともきわめて密接な関連をもっていることに注目すべきである。インテリゲンツィヤの特性としては種々挙げられるが、その中でも第一に重要な要素は「知識の所有」である。ところが知識を独占しえた階級は、歴史的にはまず貴族であったが、この貴族の特権も時代の推移とともに次第に破られるようになってきた。ここに雑階級人の形成をみたが、雑階級人こそインテリゲンツィヤの一特性「非身分性」、「非階級性」をもっともよく表わしている典型的な例といえる。

「雑階級人」はロシア社会独特の言葉であり、それだけにまた、それはロシア社会独特の現象でもある。この現象を生んだロシアの当時の歴史的・社会的要因は、次のことに求められる。すなわち、それは1)苛酷な農奴制下における資本主義的生産関係の漸進的な発達と両者の矛盾、2)それに伴う階級の分解過程、3)教育の普及と教育施設網の拡大、高等教育出身者の国家社会による要請、4)ピョートル1世制定の官等表(Табель о рангах)制度といわゆる「勤め上げた」官吏の世襲貴族への昇進の可能性等である。

1) 農奴制経済の基本部門は農業であり、それはいわゆる「自然経済」の支配を特徴

としていたが、農民は地主に全人格的に依存し、強制労働の状態におかれた農民に農業経営が委ねられている以上、そこからは技術の進歩も機械の利用も出なかった。このことは収穫率に反映したが、他方資本主義的生産関係の形成と発達に伴ない農産物の需要が増え、このことと低収穫率との矛盾が顕著になりだした。すると地主たちは、一方では農奴制経済固有の搾取形態——賦役労働と年貢——に頼りながらも、他方では農奴制を支持する立場にある彼らが資本主義的商品生産にも手を出しはじめたため、農奴制の崩壊と資本主義の進展とがますます促されることとなった。このことは「地主によるパンの製造とその販売は、すでに古い制度の瓦解の前兆であった。」というレーニンの言葉によってもっともよく表わされている。

2) 資本主義の発達に伴なって階級の分解過程がはじまり、各階層内にもそれぞれ異質性が見られるようになった。この異質性は貴族層にも見られ、彼らは財産や富の規模の上だけでなく、出身の上からも同質なものでなかった。19世紀30年代の中葉に実施された第8回人口調査によれば、「領地を持たない貴族や、農奴の所有数20人以下という小貴族がロシアの全貴族の約60%を構成しており、その層の比重はますます増大し続けた。」といわれる。彼らは自分の経済的地位を失ったのみならず、社会的・

政治的特権をも失ったのである。すなわち、彼らは分解しながら一連の下級官吏、雑階級的インテリゲンツィヤの構成員となっていた。

3) 以上のように階級分解によって零落した貴族もあったが、逆に貴族外から教育を身につけ上昇したものもいた。これを促したものは教育の普及と教育施設網の拡大であるが、これの必要性こそ国家社会の要請によるものであった。官吏、主として内務省の文官の養成を目的とする<Царско-сельский лицей>はじめその他のリツェーや、法務省官吏を養成する法律学校は、貴族の子弟のための身分的・特権的な教育機関であったが、後ヤロスラヴリの<Демидовское училище>は貴族以外に雑階級人をも受け入れ、1834年リツェー基本法の適用を受けている。ギムナジヤは貴族のほか、貴族外の子弟をも受け入れていたが、非貴族出身者の率が増すにつれて、政府は一方では貴族のみの特権的寄宿学校<Благородный пансион>を独立させ、他方では授業料の制定その他の行政的方策によって、ギムナジヤへの彼らの入学を制限しようとしたほどである。以前は貴族ギムナジヤの特権と考えられていた「卒業時の14等官の資格」は1849年にはすべてのギムナジヤに与えられた。ロシアの大学の歴史は1725年にはじまるが、もっぱら<Пансион>や<Лицей>で教育を受けていた大多数の貴族の子弟は大学に無縁であった。1809年の「官吏採用試験に関する法令」で「貴族は大学教育を受ければ昇進できる。」旨が提起されたが、効果はなかった。学生数を増しても結局は雑階級人の数が増えただけであった。このように教育を受ける非貴族出身者の数が増大するとともに、教育施設

の数も増えていった。すなわちギムナジヤや大学の他、高等師範学校、測量学校、建築学校、工業専門学校、鉱山技師専門学校等も開設された。

4) 雑階級人の主な代表者は官吏、医者、教師だったが、当時のロシアは何よりも官吏優先の社会であった。元来リツェーもギムナジヤも卒業と同時に国家勤務に入る特権と資格を貴族に与えていたが、官吏の不足により、政府は非貴族出身者にもこの道を開かざるをえなくなった。かくて教育を身につけ、国家勤務に入り、永年勤め上げた彼らは、一定の官等を得て世襲貴族(1856年12月までは8等官以上)となった。ベリンスキーは「官吏層は化学的熔鉱炉のようなもの」と述べ、ここを通過して種々の階級出身者が「これら階層のもつそれぞれの外貌を失い、父から息子へと移るにつれて旦那となった」といっている。このことこそ<Разный чин>に由来すると考えられる<Разночинцы>なる語をもっともよく示す内容であろう。

したがって、ある時期には「貴族」として登録されていても、実は以上の意味で雑階級人であったものが多かった。B. Г. ベリンスキーの父は海軍軍医となり、勤め上げて8等官となって世襲貴族を得た。Ф. М. ドストエフスキーの父は司祭の息子であったが、医者となり勤め上げた末、世襲貴族になった。M. B. ペトラシェフスキーの父はウクライナの領地を持たない貴族の出身であったが、医者として勤め上げ、4等文官になった。A. П. チェーホフの祖父は農奴であったが、金を払って自由の身となった。父は町人、本人は医者となり作家となった。H. A. ドブロリューボフや H. Г. チェルヌシシェフスキーの父は司祭であっ

た。M. ゴリキーは指物師を父とし、染物業者の娘を母としていた。

かくて各種身分出身のインテリゲンツィヤは、社会的意義のみならず政治的意義をも獲得し〈Разночинцы〉は〈Демократы〉

と同意語となったとさえいわれる。レーニンがロシア解放運動の諸段階を指摘して1861年～1895年を〈Разночинский этап〉としたのも故あることである。